勇者様は元・奴隷

佐倉風弦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者様は元・奴隷

【Ｎコード】
Ｎ７５１９Ｙ

【作者名】
佐倉風弦

【あらすじ】
奴隷だった人狼族、理道の前にある日現れたのは天乱だった。
彼は彼女を勇者だと言い、あることを告げる。
国と国を繋ぐのが勇者である。
魔王を倒しには行きません。
奇妙な和風ファンタジー。
高速で国と国を巡回します！？（注意・イラストコーナーあり）

イラストコーナー　ＮＥＷ！

イラスト置き場です。
順次増えていく予定。
イラストがダメな人は戻るボタンを連打お願いします。

【カットイン】

＞ｉ３５５５５｜４１７０＜

→　◇◆天乱と理道◆◇
黒髪の方が天乱で灰色の髪で狼の耳がついてる方が理道です。
初描きです。
理道の前髪についてるのは青いリボン。
他のキャラは出るか分かりませんが、新しいキャラが出たらまた描こうと思います。
（文字数稼ぎが苦しいです……）
年齢　理道１６　天乱１８だと思います。多分。
血液型イメージ　理道Ｂ……　天乱ＡＢ。

【キャラ単体】

＞ｉ３５７１３｜４１７０＜

【理道】

理道です。特徴は狼の耳と尻尾。
服装は袴。
リボンを忘れました……。

＞i35714—4170＜

【天乱】

天乱です。
服装は袴、羽織。

第一章

部屋のなかは電気もなく薄暗く、ゴミが散乱していて湿った空気が漂い、天井にはくもの巣まで張られていた。

この場にいるだけで気分が悪くなりそうな気がしながら、少女は錆びた足枷で繋がれている。

灰色のの髪を肩あたりまで伸ばし、深い海のような青い瞳で、そして狼のような耳と尻尾が印象的だった。ボロボロの薄汚れた着物に身を包んだ彼女の瞳は自分をこの場に繋いでいる者達に対しての怒りに満ちていた。

しかし、戦う武器もない。何もできずにただ時間が過ぎ去るのを待つしかなかった。

すすけた窓から見える空は漆黒の闇に覆われ、淡い月の光だけがかすかな明かりである。

彼女は奴隷だった。

数年前に自らの村が襲撃され、壊滅状態に陥り、かろうじで生き残っていた彼女を発見した奴隷商人に拾われ、今までずっと奴隷として働かせていた。

彼女の仕事は、悪どい人物の奴隷であり、その人物の身を守らなければならない。そして、一日の仕事が終わるとこの小屋に連れて来られて夜の間に逃げることができないように繋がれる。

ふと、物音が聞こえ、少女は顔を上げた。

近い。この小屋の前に木材が積み上げられているからそれが崩れた音だろうか。

しばらく木材の音が響き、やがてゆっくりと汚れた扉が開いた。

少女は暗闇に目を凝らした。
暗いせいでよく見えないが、気配で今まで会ったことのない人物であることは分かる。
一人の青年である。夜色の髪をきれいに揃えていて、青い瞳――紫の袴に紅い花の刺繍が入った白い羽織を羽織っている。
青年は少女の前にしゃがみ込み、笑顔を浮かべた。
そして、その声を夜風に乗せる。

「君が、理道(りどう)だろう？」

この青年が一体何をしに来たのか、なぜ自分のことを知っているのか疑問に思いながら理道は戸惑いがちに答える。

「う、うむ。そうだが――」
「こんな所に勇者がいたとはなぁ。不思議なものだ。そう思わないか？」
「勇者？」

言葉の意味が分からず小首を傾げる。
そんな理道の様子に気づいて彼は、にっこりと笑った。

「すまんな。君の問いにいちいち答えてやれるほど今の俺は暇じゃない」

笑顔で告げる彼の顔面に強烈な蹴りをお見舞いしたくなったが、生憎今は足枷のせいで動くことはできない。
青年は懐から小さな銀色の鍵を取り出し、足枷の鍵穴にはめると回した。すると足枷が外れ、自由に動けるようになる。
何が起こったのか分からないまま理道は目を白黒させる。
そんな理道の様子には構うことなく彼は理道の腕を引き、立たせ

ると出口へと向う。
彼の手を振り払うことも考えたが、今のような奴隷として生きるよりはついて行った方が多少マシな道を歩めるだろうと思い、黙ってついて行く。

◆

ボロボロの小屋から出ると、星空が広がっていた。
深い夜色の空に散りばめられた無数の輝く星々。淡い光で地上を照らす月。
緑濃い大地は月の光でぼうっと輝いていて、夢の世界にでもいるのではないかと思うほど幻想的だった。
夜風でさわさわと揺れる草原の中心で彼は足を止め、振り向いて理道の姿を見据える。
理道もそれに合わせて立ち止まる。
彼の瞳は星空を閉じ込めたかのような光を灯している。
夜風が、二人の髪を着物を揺らす。

「君は勇者だ。だから、奴隷としてあんな場所にいられても困る、死んでも困る」

真剣な表情を浮かべて彼が放った言葉は、夜風に運ばれやがて消えていく。
しかし、理道の耳にははっきりとその言葉が届いていた。
勇者というものが一体何なのか、それも気になったがもう一つ気

になっていたことを口にする。
「お前は――？」
その問いを聞いた時、彼はにっこりと笑顔を浮かべる。
「俺は、魔法使いだろうなぁ」
「魔法？」
「すまんな。二度目だが、今の俺は暇じゃない」
理道はむくれっ面で彼を見た。

◆

窓から差し込むやわらかい太陽の日差しで目を覚ます。その眩しさで、目の端にじわりと涙が滲む。
ふかふかの布団のなかにいた。ふわふわした感触が心地よい。
もうしばらく布団のなかにいたいという思いもあったが、そういうわけにはいかずに上体を起こす。
部屋のなかをぐるりと見回す。
きれいな畳と天井、ちゃぶ台に座布団、押入れや木製のタンスが配置されている小ぎれいな部屋である。昨日のあのボロボロの小屋

とは大違いの光景に若干の戸惑いを覚える。
真っ白な汚れ一つ見当たらない襖が開き、彼が姿を現した。
「起きたか。で、袴のサイズは大丈夫だろうか？　生憎、俺の昔の分しかなくてな。流石に女物はないからなぁ」
笑顔で告げられ、理道は自らの服装に目を凝らす。
昨日着ていたボロボロの着物ではなく、若草色の袴である。
〈おかしいな。確か、あの着物のまま布団に潜ったはずで……〉
「ああ、ボロボロの着物のままというのもどうかと思って――」
「あ、うん。そうだな……うん」
「どうかしたのか？」
彼はこちらの様子を伺うのように覗き込んでくる。
理道は慌てて視線を逸らした。
〈私の身体は未発達なんだし、見られたところで大したダメージはないよな……？〉
できる限り考えないようにしようと思い、顔を上げて口を開く。
「まだ名前を聞いてないんだが……」
「うむ？　俺か？　俺は、まほ」
「いや、役職じゃなくて名前」
「天乱（てんらん）」
「天乱か……」
そう呟き、その後の言葉が出て来なかった。

実際、何を話せばいいのか分からない。とりあえず、奴隷という身分から解放してくれたのは分かったのだが、これから何をするのか……そういったものは説明してもらわないといけない。
一応、解放してくれたことには何らかの目的があったのだろう。でなければ、そう簡単に奴隷解放などできるはずがない。
天乱の様子を伺っていると、彼はにっこり微笑んだ。

「まあ、その、腹が減っただろうから朝食でもどうだ？　昨日は何も食べてなかったろう？」
「う、うん」

理道は腹が空いていたのは事実だったので、素直に頷いた。
布団から出て立ち上がると天乱の後に続き、部屋を出た。
木製の狭い階段を下ると、美味しそうな匂いが漂う台所に出た。既に食事の用意をしていたらしく、一枚の襖を挟んだ少し広めのきれいな部屋の中央に配置されたちゃぶ台の上には、のりを巻いた丸いおにぎりと味噌汁、お茶が用意されていた。
ちゃぶ台を挟んで向かい合って正座すると天乱が箸を差し出してくる。

「冷めないうちに食べるといい」
「う、うむ」

こくりと頷き、箸を受け取った。
おにぎりは塩の味がきいていて、少し塩辛い。味噌汁は具が多くて意外とボリュームがあり、味噌の味が美味しかった。
味噌汁をすすりながら理道は天乱に顔を向ける。

「これは、お前が作ったのか？」
「うむ。生憎気の利いたものは作れんが」

お茶の入った湯のみを置いて、天乱は再度口を開く。

「で、昨日の話だが……」

「勇者とか」

「うむ。勇者というのは、この国と他の国を繋ぐ英雄なんだ。その勇者が様々な国に出向き、重要人物と交友を深め、同盟を結ぶ。しかし、これがまた難しくてなぁ。当然、相手の国にも他の国と同盟を組むのを良しとしない者も多い。それで、勇者を暗殺しようと試みるものもいるから、いざという時に応戦できて実力のある特定のものしか任せられないと」

「特定？」

「人狼族。君もそうだが、人狼族は極端に生命力が高く、力も強い。だからこそ、勇者に任命できるんだが、勇者を良しとしない奴らの手により、人狼族は壊滅。残ったのは君だけだ。しかし――」

天乱は眉をひそめる。

「あれだけの力の持ち、強大な生命力を持つ人狼達がなぜああも敗れ去ったのか。それだけが謎なんだ。どれだけの人数と武力で挑んだとしても相手はあの人狼族。半数ぐらいは生き残っていてもおかしくはない。いや、むしろその方が自然だっただろう」

「……」

〈確かにそうだ。みんな、あれだけ強かったのに……たった一夜で〉

理道も疑問だった。

自分も人狼だからこそ、その強さはよく知っていた。父も母も強かった。そして、争いで人狼族の者が負けるところなど一度たりとも目にしたことがなかった、あの日までは。

「まあ、朝からこんな話をするのもあれだ。もう少し明るい話題にしよう」
「う、うむ」
「実は俺が君を探していたのは将軍に頼まれてなんだが」
「将軍？」

理道が首を傾げると、笑顔だった天乱の顔が引きつった。
そして、恐る恐るといった感じでゆっくり口を開く。

「ま、まさか君は……将軍が何なのかも分からんというんじゃないだろうな……？」
「いや、その……分からないんだが」
「……」
「……」

固まったまま二人とも沈黙する。
風で窓がカタカタと揺れる音だけが部屋のなかに響く。
やがて天乱が口を開く。

「ま、まあ、ずっと奴隷だったわけだし、無理もないか。将軍というのはこの国を収める者だ。まあ、外国の大統領のような感じで……まあ、この国の人間に外国の例えを教えても問題ないだろうが」
「じゃあ例えるなよ。まあ、偉い奴なんだな」
「……将軍に会う時は、その言葉遣いは何とかしておけ……」
「何でだ？」

理道はむくれっ面で天乱の顔を見る。

第二章

朝食を終え、天乱が台所でせっせと食器を洗っているなか理道は窓から外の風景を眺めていた。

木製の枠でできた窓からは、心が溶けてしまいそうなほど鮮やかな青い空と眩しい太陽、緑の野菜の数々が実る畑。その向こうには、木製の住宅街や団子屋などが目に映った。

奴隷だった頃とは全く違う風景に思わず魅入ってしまっていた。

窓から身を乗り出していると、うっかり落ちそうになり、すぐに引っ込むことにした。

そうしていると片付けを終えたらしい天乱が部屋に戻って来て、隅にあった小さな木製の引き出しを開け、なかから小さな小袋を取り出す。それは、シャラシャラと音をたてる。

立ち上がって理道の元まで来た彼は、笑顔でそれを差し出した。

理道は不思議そうに小首を傾げる。

「それは？」

「金だ」

「金？」

目を丸くして天乱を見たが、彼の表情で相変わらず笑顔である。

「これで好きな刀を買って来るといい。勇者には武器が必要だからなぁ。窓から団子屋が見えたろう？　あの裏に店がある」

「い、いいのか？」

理道は少し戸惑った。

刀は結構値の張る物でそう簡単に買えるような物ではない。その金を出してもらうなど悪い気がしてなかなか手が出なかった。

そうやって悩んでいると彼は彼女の手を掴み、小袋を持たせる。
「もちろん。武器も持ってない戦えない勇者のお守りほど大変なものはないからな」
確かに素手で戦うというのは厳しい。武器を持っている者を相手に素手というのはかなり危険である。
「というわけだから、買ってくるといい」
理道はこくりと頷き、天乱の顔を見た。
そしてゆっくりと口を開く。
「お前はついて来ないのか？」
「俺は忙しいからなぁ。刀ぐらい一人で選べるだろう？」
〈忙しい忙しいって何が忙しいんだろう……〉
考えながら理道はじっと天乱の姿を見据えた。対して忙しそうには見えない。
考えても仕方がないことが分かり、こくりと頷き、家を出ることにした。
狭い玄関から外へ出ると、明るい太陽の光が地上に降り注いでいる。その光のせいか、地面に生える草花も輝いているように見える。
早めに行って帰って来ようと早足で歩き出す。
草花で埋め尽くされた柔らかめの道を進んでいき、窓から見えていた団子屋に近づく。

◆

団子屋には赤い布をかけた長椅子が店先にあり、大きな日傘がある。

それを通り過ぎ、裏側に回ると木製の小さな建物があり、窓からなかを覗き込むと刀が多く並んでいた。

ここで間違いないと判断し、古いドアを開ける。きしむ音が響くが店主らしき女は全く気にする様子はなく、刀を磨いていた。

二十代前半程度に見える女は長い黒髪を背まで垂らしており、赤い着物を身に纏った美人だった。炎のような紅い瞳が印象的で何か力強い雰囲気を纏っている。

女は理道ににこりと微笑みかけた。

「あなたが勇者様かしら？」

「う、うむ」

理道は一瞬迷ったがこくりと頷いた。

「少しお待ちなさい。あなたに合うものを探すから」

古く薄汚れた木製の棚に並ぶ刀をじっくりと見据えながら女は視線を巡らせる。

しばらくかかりそうなので理道は椅子に腰掛けた。

女は刀身の紅い炎が燃えさかるような刀をゆっくりと丁寧に取り

出して理道の目の前まで来てしゃがみ込むと差し出した。
「これが、あなたに一番合うと思うけど、そうかしら？　もちろん、おすすめというだけで他に気に入ったものがあればそれを買ってもいいけれど――」
炎を灯したような紅い瞳でじっとこちらを見据えながら告げる女。
理道は刀を凝視した。
周囲にある他の刀も一通り見回してみたが最終的には、その刀に視線を戻した。
「これは」
「炎豪刀と言って、炎の神が宿る刀。見たところ、あなたは炎と相性が良さそうだから」
女は微笑んだ。
「これにする？」
「う、うむ」
理道は自然と頷いてしまった。
彼女は満足げに笑うと炎豪刀を黒い鞘に納めて白い布を巻き、紐でしっかりと縛る。
小袋から金を取り出して女に渡すと、刀を受け取る。
「落とさないようにね？」
「う、うむ」
ぎゅっと刀を握り締め、ゆっくり立ち上がる。
ぺこりと頭を下げると店を出た。

◆

家に戻ると天乱が出迎えてくれた。
奥の広い部屋に通される。
その部屋には大きな窓があり、太陽の明かりを大いに招き入れている。
部屋の奥には、質素だがきれいに手入れされた祭壇のようなものがあり、木製で先端には青く輝く宝玉が取り付けられている。
理道は目を丸くした。

「これは……」

彼は杖を手に取り、告げる。

「魔法の杖というやつだ。名前は、水奏華（すうそうか）」
「魔法か」
「で、君の刀は」

天乱は理道が持っていた炎豪刀をひょいっと取り上げ、紐を解いて布を取り去る。
真剣な眼差しで炎豪刀をじっと見つめ、しばらくたつと理道に返す。
そして呟く。
「うむ、これはいいな」
にっこりと笑顔を浮かべる。
理道は怪訝そうに眉をひそめる。
「いいとは？」
「分からんか？」
「分からん」
そう返すと彼はやれやれといった様子で口を開く。
その様子にむっとしたが黙って話を聞くことにした。
「この刀は炎。そしてこの杖は水」
「だから何なんだ？」
小首を傾げると軽く頭を小突かれた。
「ここまで聞けば分かると思うんだがなぁ。炎は水を操る敵には不利。水は土には不利」
「水が土に？」
立っているのが疲れたらしい天乱は、その場に座り込んで続ける。

「土は水を吸収する」
「あ、そうか」
「属性というのは、数種類あった方が敵によってうまく対応できるから便利だ。同じ属性が二人いてもあまり対応できないだろう？最も、それならそれぞれ全ての属性ごとに人を用意できればいいのだが、生憎人手が足りなくてなぁ」
「ま、まあ、私は強いし大丈夫だろうが」
「君みたいのを自信過剰と言うんだ」

すかさずそう言われ、理道はむっと口を尖らせた。
刀に視線を落とし、鞘から抜いてみる。
炎豪刀の刀身は紅く炎が燃えさかるように輝きを放っている。
刀の使い方は親によく教えてもらったこともあり、何の問題もない。一応、戦った経験もあるからその辺りは心配する必要もなかった。

〈それにしても……〉

「戦うなら、やはりサラシは巻いておいた方がいいか？」
「ああ、その話か。まあ、君の小さな胸なら巻かなくても問題はないんじゃないか？」
「そうか……ん？」

ふと、違和感を覚えた。
理道は恐る恐るといった様子で天乱に顔を向ける。

「何で知ってるんだ？」
「だから、昨日着替えさせた時だが、何か問題あるのか？」
「い、いや、その……だな」

理道は顔が熱くなるのを感じながら天乱の姿をじっと見据える。
とりたてて変わった様子もなく、いつも通りの表情である。動揺する様子も一切なし。

「で、何か問題があるんだろうか？」

にっこりと笑顔で尋ねてくる。
理道はうっと声をつまらせ、これ以上この話を続けるのは自分も正直好ましくはないので終わらせてしまうことにした。

「いや、何も」

顔を逸らし、すぐに貸してもらっている部屋に戻ることにした。
狭い木製の階段を早足で上がり、部屋の襖を開けてなかに入ると畳んで隅に置かれていたふかふかの布団を素早く敷き、そこに寝転んだ。
ふわふわした感触が背中に伝わってきて眠気が襲ってくる。
寝転んだまま炎豪刀を手に取り、掲げる。
きれいな刀身は、清らかな炎を宿している気がした。奴隷だった頃に持たされていたのは刃のかけたボロボロの刀でこのような美しさは一切なく、本当に戦うだけの物であった。
しかし、この刀は戦うだけの物ではない気がしてならなかった。

「勇者か」

国と国を繋ぐ――。
理道は炎豪刀は布団の脇に置くと、目を閉じた。
木製の天井が視界から消え、目の前は暗闇に包まれる。
外国。
理道も行きたいと思っていた頃があった。今はどうしても行きた

いとまでは思わないが。
小さな頃に父親に聞かせてもらった話を思い出す。
国というのは、この国だけではなく他にも多く存在していて、それぞれ文化や人の外見が違っていたりと、どこか別の国に行くだけで今まで自分の知らなかった新しいものが発見できるのだと。
その話を聞いて、いつか自分も様々な国に行き、新しいものを発見したいと思いを馳せていた。
あの日までは、それが夢だった。
奴隷になってからは、そんな夢のことなど考えられなかった上、もう死んでしまってもいいとまで思ったことがある。
〈これは、好機なんだろうか？　私のかつての夢を叶えるために誰かがくれた贈り物なんだろうか？〉
そう思いながら眠りに落ちた。

第三章

その日は朝から外に連れ出された。
まだ朝日が昇ってない薄暗い時間帯に起こされ、早々に出かける準備をするようにと言われて、理道は慌てていた。
狭い玄関から外へ出ると空は、薄い青色で少し暗さがあり、太陽の光はまだ見えなかった。
冷たい風が地面に生える草花をさわさわと揺らしている。
素早く進む天乱の後を足早に追っていた。
しばらく歩き続けるとやがて住宅街の通りに出て、さらに進むと町の中央の大きな道へと出た。

正面を見上げると大きな城が見える。少し先にやけに豪華な赤い橋がかかっていてその向こうに石造りで豪華な金の装飾が施された巨大な城。
理道は、城を見上げながら呟く。

「ここは、城下町だったのか？」
「うむ。まあ、城下町にしては少々小さい気もするが――そこに城があるからなぁ」

天乱の言うことは正しかった。
その場に城があれば、どれほど小さな町でも城下町になり得る。
下を見ると勢い良く水が流れる深めの川があった。その上にかかる橋は頑丈で揺れたりすることはないのだが、橋の下を覗くとさっと目を背けたくなり、理道は天乱の着物の袖を掴んだ。
「思ったよりも恐がりなんだな、勇者というのも」

にっこりと笑顔を浮かべて告げられ、理道はぱっと離れてむくれっ面を浮かべた。
そんな理道の様子を面白そうに眺め、天乱は城の方に向き直ると再び歩き出す。それに続いて、理道は恐がりだと言われないようにと一定の距離をとりながら歩く。
橋を渡り終えると城の入り口だった。
大きな木製の扉があり、その前には武士らしき人物が二人程立っていた。
武士の一人はこちらを見ると近づいて来て、じっと見つめてきて確認したようにこくりと頷いた。

「例の勇者か。将軍がなかでお待ちだ。将軍の所までの道は――」
「俺が知ってるから大丈夫だ」
「なら、行くといい」

武士が大きな扉を開くと、その先には豪勢な飾りがある内装が目に入った。
天乱はこちらに向き直るとにっこりと笑った。

「では、行こうか？」
「う、うむ」

理道は素直に頷いた。

◆

理道は少し緊張していた。
このような豪華な建物のなかに入ったのは初めてで戸惑いを隠すことができなかった。
将軍の部屋に行くまでの廊下には、大きな窓がいくつもあり、町中を見渡すことができ、その風景は絶景である。
そして窓からは太陽の光が大いに入り込んで場内を明るい光で包み込んでいる。
廊下はきれいに掃除されているようで、油断すると滑ってしまいそうなほどすべらかであり、この城で働いているらしい武士や侍女と何度もすれ違った。

〈こんなすごい所に住んでる将軍って言うのは一体……〉

廊下を歩いている間中、将軍がどんな人物なのか気になって仕方がなかった。
ようやく天乱が立ち止まり、理道も立ち止まる。
汚れ一つない襖の前である。襖はいくつも並んでおり、相当広い部屋であることが伺える。
天乱がそっと襖を開けると、そこには金の装飾が施された大きな部屋があった。
畳には汚れも穴も開いてなく、部屋の奥には白いカーテンで囲まれたスペースが存在していて、そのなかに誰かがいるようであった。

「将軍」

天乱が呼びかけるとカーテンが開き、その人物の姿が見える。
金の紐がついた赤い座布団に座る男は黒い髪を後ろで一つに束ね、金の刺繍が施された豪勢な着物を身に纏っている。見るところ、歳はまだ二十代前半、もしくは十代後半といっても通りそうなほどである。

「天乱か。やっと連れて来たみたいだな？　それが、人浪族の勇者か？」
「間違いない」
「ふむ」

将軍は理道に目を向け、手招きした。

「もう少し前に来い」
「う、うむ」

理道は緊張してカチコチになりながら、ぎこちない様子で前に出た。
将軍は彼女の姿をまじまじと見つめ、そして微笑んだ。

「間違いなく人浪族みたいだな。いやぁ、懐かしいな」
「懐かしい？」

将軍の口から出た思わぬ言葉に理道は小首を傾げる。
彼は、その様子にすぐに気づいて説明を始める。

「実は、以前にここに勤めてた人浪族がいたんだよ。もう歳だったからな、引退して引っ込んだんだけど」
「ここに……」

もしかしたら自分の知っている者かもしれないと思い、少し気になった。

〈もう歳だったというと、祖父と同じぐらいだろうか……〉

「引っ込んだとはどこに？」

尋ねた時、彼は笑顔を浮かべる。

「喜べよ？　その人浪族は、自分の故郷ではなく、辺境の地に隠居してるんだ。それも外国の」

「ということは――」

その言葉を聞き、理道は一つの可能性を考えた。

辺境の地に隠居ということは、故郷に帰ったわけではないのは間違いない。外国となれば、あの人浪族の村が襲撃された時にあの場にいなかった可能性がある。

「今も生きてるのか」

「ご名答。まあ、老人だから戦ったりはできないから隠居してるんだけどね。正確には、人浪族はまだお前とあの老人の二人いることになる」

「私以外にも……」

〈それなら、会ってみたいな。話したことのない相手かもしれないが、それでも……〉

そう考えていると彼が再び口を開く。

「で、やってほしいのは他の国に出向いて同盟を結んでもらいたい。最初の行き先は、マルフェイルランド。もちろん、あの国に行く方法は用意してある。あと、その老人がいるのはその国だ」
「う、うむ」

理道はこくりと頷く。
将軍は、黒い引き出しから赤い巻物のようなものを取り出して、一旦紐を解いて中身を一通り確認すると元に戻して紐を結ぶと理道に手渡した。
それを受け取った理道は目を丸くした。

「こ、これは？　私は忍術は使えないんだが……」

困ったような表情で言う理道。

「違う違う。忍術とかじゃないからな。それには、俺の署名があるからあの国に行って国王に会ったらこれを渡してくれ。ほら、将軍の意思で同盟を結ぼうとしていることが確認できないと信用されないだろう？」
「そ、それもそうか……」
「まあ、詳しいことは天乱に伝えてあるから」

そう言い、彼は天乱に目を向ける。

「ちゃんと覚えてるよな？　忘れたなんてことは」
「そのようなことは決してないから安心するがいい」

笑顔で返す天乱。

〈外国か。どんな所なんだろう。あと、同じ人浪族というのは……〉

◆

天乱に案内されて来たのは、城の裏だった。
大きな広場で周囲には何もなく、青空がよく見える。
その広場の中央にあったのは、羽がついた巨大な機械だった。
飛行機というものらしく、将軍が外国から取り寄せたものらしい。
これを使って外国まで行くことが可能だと。
理道はじっと飛行機を見据えた。

〈こんな鉄の塊でどうやって……？　あれに乗ったら瞬間移動か……〉

そんなことを真面目に考えていると、不意に飛行機のエンジンがかかり、耳を塞ぎたくなるほど大きな轟音が響き渡り、理道はびくっと反応して天乱にしがみついた。
尻尾も下がりきってしまう。

「まあ、あれは初めて見る時は恐いだろうな」

苦笑いを浮かべ、天乱はぶるぶる小動物のように震える理道の手を引いて飛行機に向かう。

入り口まで来ると理道が左右に首を振っていたが、気にせず機内に押し込んで自分も乗り込んだ。

機内には椅子がいくつか設置されていて、長旅用らしくベッドやテーブルなども配置されていてそこまで不自由はしなさそうである。

「はじめまして」

声をかけてきたのは一人の少女である。黒い着物を着て、空のような水色の髪をてっぺんで一つに結んでいた。そして、着物とは不似合いな黒い手袋をはめていた。

「私は、李衣夜（りいや）と言います。パイロットなんですよ。よろしくお願いしますねー」

にこりと告げる彼女に対し、理道は首を傾げる。

「この飛行機を操縦する人ですよ。ちゃんと座っててくださいね、危ないですから」

「あ、危ないのか……」

第四章

飛行機が見える地上の風景は絶景だった。
下に白い綿のような雲が流れていて、見渡す限り青い空だけが広がっていた。それは、地上では決して見られることのない天空の世界であった。
しかし、その風景に感動する反面、理道はこの鉄の塊はどう考えても重いだろうから墜落してしまうのではないかと冷や冷やしていた。なるべく考えないようにと努めているうちに飛行機は着陸し、広い大地に降り立った。
飛行機が止まると、操縦席にいた李衣夜が立ち上がり、駆け寄ってきて明るい声を発した。

「着きましたよ！　ここがマルフェイルランドです」
「つ、着いたのか」

理道は椅子から立ち上がると小さな窓に目を向けた。
その先に広がっていたのは、茶色い大地でポツポツと木々があり、果てしなく道が続いているようだった。
理道のいた東風国は草花など自然が多いのが特徴だが、この国は違うようだ。茶色い大地や大きな岩山が目に入り、緑はあまり見当たらない。
町などはどんなものなのか、どんな人が住んでいるのか期待を膨らませた。
李衣夜がドアを開け放つと強めの風が機内に入り込んできて、少しだけ身震いした。
李衣夜はにこっと笑い、
「では、いってらっしゃいませ」

理道は目を丸くして彼女を見た。

「お前は行かないのか？」

「はい、私はこの飛行機でしばらく飛び回ってますから。大丈夫、きっとあなた方の用事が終わる頃には戻って来ますから」

「そ、そうなのか」

どうやら彼女は、よほど空を飛び回ることが好きらしい。

止めても無駄だろう。

そう思っていると天乱も椅子から立ち上がった。

「では、そろそろ行くか。いずれにせよ、早く行った方が良かろう」

「それもそうだな、じゃあ」

李衣夜に顔を向け、一言。

「また……」

「はい、また」

李衣夜は満面の笑顔を浮かべて手を振ってくれた。

◆

飛行機から降りて、茶色い道を歩き続け、町に辿り着いた。
レンガ造りの住宅が立ち並び、色とりどりの花で埋め尽くされたおしゃれな花壇も目に入る。凝ったデザインのカフェや飲食店、雑貨屋、服屋などがあった。
明るく情熱的な太陽の下、大勢の人々で賑わっていた。
この国の者は、金色の髪の者が多く、種族は人間はもちろん、エルフも多数見かける。
初めて見るものばかりで理道は休むことなく辺りを見回しては新しい光景を楽しんだ。
その目に映した大勢の人々や風景などをしっかりと心に焼き付けた。
辺りをキョロキョロしているせいで、たびたび天乱の姿を見失って、見つけてもらうことにもなってしまった。
コンクリートで作られた道を歩き続け、辿り着いたのは巨大な城だった。

豪勢な城で大きな窓がいくつも存在し、そして庭園には大量の薔薇が咲き誇っており、水が噴出す女神を象った噴水まで存在していた。城の前には大きな黒い門が構えていて、立派な鎧を身に付け、槍を携えた兵士が控えていた。
理道はその光景に目を丸くして魅入っていた。

「こ、ここもすごいな」
「まあ、国王の城だからなぁ。で、兵士に話を通さなければならな

いんだが」
「そ、それは私がやるのか」
「そうではないのか？」

彼は不思議そうに首を傾げる。
理道はじっと門の前に立つ二人の兵士を交互に見つめて、すぐに首を左右に振った。
そんな理道の様子を見て天乱はため息をつき、手を出した。

「な、何だ？」
「俺が話して来るから、将軍からもらった署名を貸せ。証拠がなければどうにもならんだろう」
「うむ」

こくりと頷き、懐から巻物を取り出すと彼に手渡した。
それを受け取った天乱は背を向け、兵士の方へと歩いて行く。
その様子を理想は内心ドキドキしながら眺めていた。
何やら話をしているようだが、ここからでは声は聞こえない。
兵士が首を左右に振る様子や天乱が兵士に巻物を渡す様子が見え、やがて天乱は手ぶらで戻って来た。

「署名はどうしたんだ？」
「兵士に渡して来た。国王に見せて確認するらしい。まあ、明日まで待てと」
「そうなのか。じゃあ、明日までどうするんだ？」
「まあ、適当にだなー」
「適当に……」

◆

町のなかを見て回ることにした。
特に行き先を決めることなく、町の中央のコンクリートの道を進み続けて目に留まった店のなかを物色したりした。この国の服は着物とは全く違ったふわふわしたスカートやネクタイとか黒い礼服なんかが見られた。
様々な店を見て回っているうちに、腹が鳴った。
理道は、腹を押さえながら呟く。

「腹が減ったな……」
「そうか。では、何か食べるか？　この国の食べ物もどんなものがあるか興味があるだろう？」

にっこりと笑って言う天乱に対して、素直に頷いた。
服も小物も違うのだから、食べ物も違うのだろうと思った。
近くにあった飲食店に足を踏み入れると、白いテーブルがいくつも並んでいて、天井にはちょっとした装飾が施されたランプが取り付けられていた。
すぐに店員が来て、席に案内された。

理道達が案内されたのは、窓際の席で外の様子がよく見える。

店員に渡されたメニューに目を凝らした。
そのメニューには、聞いたこともない料理の名前ばかりが並んでいて不思議であった。
理道はじっと目を凝らして何の動きもない状態だったので、流石に天乱が声をかけた。

「理道、そろそろ何を食べるか決まらんか？」

苦笑いを浮かべながら告げる天乱に反応して、理道はキョロキョロしながら口を開く。

「そ、その、メニューが多くてなかなか決まらんのだが……」
「それはまた……。まあ、食べたいと思うものを適当に頼めばいい」
「うむ」

結局、理道はカレーライスを頼むことにした。

◆

カレーライスは、ニンジンやじゃがいもなど具が多く入っていて、

いい匂いが漂っていた。
理道は辛いものが苦手なので甘口を頼んでいた。
運ばれて来たカレーライスをしばらく不思議そうに見つめた後、銀のスプーンを握った。

「い、いただきます」

スプーンを持ったまま両手を合わせ、言うとスプーンでカレーライスをすくった。そして、口に運ぶともぐもぐと噛んで飲み込む。
カレーの味が口のなかいっぱいに広がった。
理道は一旦スプーンを置いた。

「う、うまいな」
「うむ。ちなみに不味くても不味いと言ってはいけないぞ？」
「分かってる」

こくりと頷くと再びスプーンを持った。

「それにしても、国の違いって大きいんだな」

理道はカレーライスを食べ終え、水を飲みながら呟いた。
服も食べ物も人種も違う。
新しいものを発見できる楽しみもあったが、その反面、少しだけ不安もあった。

「そうだなぁ。国の違いは様々なものが発見できる。しかし、国が違えば考え方も違うことは稀ではない。それによって生まれる歪み

も多い。むしろ世界に存在する国が一つだけなら、もっと平和だろうなぁ」

そう告げる天乱。

理道は相変わらず水をすすりながら。

「でも、多くの国があるのも悪いことじゃないと私は思う。歪みも生まれるし、戦争も起こるだろうが……違ったものが多く存在する方が楽しいとは思うし、いろんなものがあること自体が世界というと、スケールがでかいが……この世界の誇るべきところだと思う」

「ふむ。確かに君の言う通りだ」

天乱はにっこりと笑った。

「まあ、その――違いがあっても仲良くなれれば、それでいいんじゃないか？」

「そうだな。それが君の役目だ」

「うむ」

国と国を繋ぐ。

それは、どうしても受け入れない者もいるかもしれないが、少しでも多く繋げば輪は広がるだろう。

理道は窓越しに青空を見た。空には区切りなど一切なく、果てしなく繋がっている。大陸と大陸を繋げることは不可能だが、人を繋ぐことは不可能ではない。

〈やってみせる……。それと、人浪族が敗れた謎も解く〉

なぜかは分からないが、国と国を繋いでいけば人浪族がなぜ敗れ去ったのかも分かるような気がした。

「では、明日に備えて早めに休むか」
「うむ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7519y/

勇者様は元・奴隷

2011年11月25日23時54分発行